

若  
し  
あ  
ふ





大江善の阿字一守漫抄の序を  
ゆきとト店のもら及古体中の續きたる  
紙褶数句を家土を新にたし  
と姑ふるをの序にあらわす  
おんことらもの標目をあつた  
と辨幸六今をまうのふ做ひ



くらの世ふうはるまとい今を昔に  
志のふらふも何ぞ驚くといふ下こは  
あまやとそねはとまきうのほまうちほや  
持しとる年竟少のともあふく一や

又久之末仲を 抱 蕨

永末重 (金)

李樹をきく一と姓ふ呼鯉魚城  
得る子能名ときく一暫言ハ寸  
貫子の草一を摘む事一かうは乃  
菴能ひらきをけ一免有一さの  
高あをとも漏る寸事一ふ一

羊



猶 あやう あり あ 世 よ の 秘 ひ 物 もの と 比 ひ じ を  
古 こ き 新 しん 端 たん の 志 し 林 りん 島 しま 州 しゅう 四 し 方 ほう の  
風 ふう 中 ちゆう 律 りつ 便 べん 多 た 多 た 魚 ぎょ

晋 好 以

豊 齋 五 三 考



山 津 一 悔 く 多 た 魚 ぎょ 為 な 三 さん 考

青 木 榎 カネ の ち ち り 一 一 足 あ 三 さん 考 梅 通

う ち 明 あ る 蓬 ほう の 葉 は 湯 ゆ 着 あ け 立 た 立 た 字

お ち ち 一 一 長 ちゆう 屋 おく も 拭 ぬ い 一 一 ち ち 久 く 通

朝 月 あ した した 十 じゅう 七 しち 三 さん 一 一 言 い お 鏡 かがみ 字

落 お ち ち も け け ち ち 秋 あき の 水 みづ 嵩 かみ 通

①



雀もあつた冷に春を入亭  
 古少ぬりのを伝延佛のあ  
 あちこつて現る様もなる候障子  
 何支の悉ゆる咄寸掛つる  
 ち原いついなきを寝て反歌  
 肩て牙道ののまゝなる女  
 ちり晴し暮の月夜にさし白  
 所よ小稀な河麻もさゆる  
 宇通 宇通 宇通 宇通 宇通 宇通

うり物にうすは後のな入る  
 余ふていとねあはれし流巻  
 雅尻の終るる世の言垣  
 横雲もあつて柳のさる出寸  
 左義長のあつたを衛士ホの掃  
 漁の強きも目し中し  
 切戸のうきま来て居るを麻  
 出るしつきし夏草の虫  
 宇通 宇通 宇通 宇通 宇通 宇通



うらさるるまに橋い形りりり  
まにまらるる無垢の二子ぬ着  
村の流のなたる娘の舟あり  
伐株ある仔のあふまき  
き行のよりみあす夕日暮  
たらしも楳の隈にねる月  
伝流詠へけしる春の垂の言さ  
屋泉の強しそ狗走もまき  
宇通 宇通 宇通 宇通 宇通 宇通

あいに可あるとおろし繁古ま  
世常しそい味管あも持  
るまを耐子つりそにひきまらひ  
二条の帯巻の三條へ飛ふ  
山このまにまらるるまらるる搦  
かうくあまらるる暖る  
宇通 宇通 宇通 宇通 宇通 宇通



はあふに只秋風を浦傳ふ

并舎

晴まる空に一ひるしき

契字

月見言ふこの家の煤掃て

舎

あの杉あゝの枝木にねる

字

は刺て羽織ぬく写しきり

舎

冬の日顔の猪先にさき

字

大古の陣にちきき隠居寺

舎

ものひさるがらゝり

字

仕合世に親もあやる娘とて

舎

配をけるも笑ふあある

字

夏へさすつるあ牛もるさ

舎

流き一汗のときる碓の井

字

夕立をぬくしあある月の

舎

あゝとさる榊の大きき

字



肥可も腹を極く足叩いて  
二百とよまゝいさゝい骨打  
とち風は吹くもその義とある  
山の百にはきまふ——  
坐りてい萬白の遊物とて  
いさゝかやれあむ押入  
高しは行の業も至極宿  
若きの一もいい吼るまの——  
善 字 善 字 善 字 善 字 善 字



おかしと畑に木の葉の燃つと  
小まを待てて正——  
破て舞てめ方のまも破——  
下手な仲人らとてとてに  
河津菘をちるる橋の通るけ  
あつとくと橋た——  
何れもいさゝかある善の月明り  
舞つくるいさゝかのねく——  
善 字 善 字 善 字 善 字 善 字





あまのりて代糸いそしははせ  
 長尻の尻のうちつてすある  
 かなしと横焔のあまきいひく  
 とくともいへぬ雪日の照澤  
 福をたもつたまの船あり  
 藪を出て行るいうとま

字 為 字 為 字 全

鳴あまふし帯い流して雪の治  
 冬の白布の字きてつき  
 入らざる地子の楯取ゆるやに  
 垣たしあまの言解いてゆく  
 百にあいに屋根まきあまの月見臺  
 こまのくしういあまの相

有節  
 字 萬 字 萬 字 萬





川之のほとりある水調子  
 焚火のけねる煙に煙をぬる  
 養潤の法寄附にちちも別つた  
 山古せいきくに京の地  
 藤柳の下にまけーの夏と守  
 町をくある楊子 社音  
 見えそる月にそるーと志のひま  
 東と田ふ子もをりひる  
 草 字 草 字 草 字 草 字 草 字

濱側い疎奥に椽のまゝ勢き  
 つく程いこうる一麦葉の糸  
 土の底のづゑをぬ程行そつ雨  
 浮く柱の眼をけつとあく  
 玉掬に海生もえり輪目々冷  
 療治をまより十ニ細あく  
 云葉アきまーや廊のま程の果  
 棧妻をえりくあつたの階  
 草 字 草 字 草 字 草 字 草 字 草 字 草 字



言杯の餘もあまいると氣を  
 舎式のうらひ鳩も強き  
 菜畑の毎りの小菊は枯らさ  
 火傷にあうて多からぬ  
 脊う伸て空司の孫の女も  
 甚まの白もおそよる月  
 木屏のこもり玉燈籠の掛簾  
 矢背ころろと滑る路のまゝ  
 草 宇 草 乎 草 宇 草 宇

権舞の曠にのみまてえとま  
 窓の刊て右のまをぬきの病  
 うも一室負てお色の橋も  
 廁とる終いおけり後小屋  
 夕靄をうりて洞あまの枝  
 埃りのとまりま粒の從推  
 草 宇 草 宇 草 宇







道草を船当にまける坐敷の舟

下サレ 碇石

船くこもる魚網の光る舟

勇賀

猿車しくて庶務も碇にま

下理 猿車

江戸を舟もつても見るまの舟

南都 季楽

龍のちりぬ船といきぬまのま

伊ヨ 持舟

志げし舟の船のまの舟のま

尋香

明もこの舟もつても見るま

アハ 痴牛

人音もまの舟もつても見るま

氷壺

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

奥 素磴

猫のあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

碓池

上下の海を渡る舟に渡る舟

龍寺

空にある舟のあゝあゝあゝあゝ

心足

雲を渡る舟に舟をつく舟を渡る

半谷

海を渡る舟も葉の舟も舟

永年

子の戸に舟もつても見るま

空蒲

つゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

雪年



正月の子もかき葉もさう磯苔菜 抱義

曳ておく小松也雪の都一つく 宇山

松空をも一白にさすの遠出式 士明

桑いさもさぬ深雪也小松引 梅通

乾坤

正月也 答もる度に解憂るる 半湖

正月のこえ懐こもさやめ客 ころこ

そと音のそ余にころ、ろく柳 葉居小枝

ある雪に降てのころそまの空 不甘

長平さを流してさぬ畑の輪 秀高

降てある雨もろく 小一日 曳二

木鬼也子とのころる 雪の面 赤南

ころそむ日也磯一きころ山の砂 猪交

鶏も踏も仲一歩けさ雪も丸 甘茶

遠里の松を照當也福一子こ 管室

海くも舞くまのの木の雪居式 下毛 隆泉



海を氣よそのるや雨霧の下り舟

真

六槐

一斗と云はや務のまゝと樹のゆる

尾張

士芳

東風止て障子に浮る月夜式

如泉

船東風に去るまほのま樂式

香芸

浮舟をける両船く本末一柳

四端

去風が空ら牛返ふ音相略

上毛

我妻

白鷺に松の影ありまの力

碓局

脚を空を鴨の音きまは月

出羽

葉鏡

暮る海を了ま打るけの月

備后

雪白

田舎やあまき海をけるの力

一の醒

湯ふや舟より進ま人の足

播磨

一瓢

頂上と思ふ白氷が海をまぬ

機足

梅打と勇氣い出て風堂より

上毛

梅岩

沫雪やちりりあるとついで二尺

青々

漏口の氷も高し第一柳

下波

秋化

山鳥の尾を空く細の雪島式

出房

真雪



植物

墓原に三好公梅也糸岳古

古人 逸淵

人よりもうゑに逢ふり里つき

上毛 米室

三月月也先を控ぬに梅も咲

下毛 鳳所

けつこもて紫と梅の林う那

下毛 麓外

うゑつるやみまきある草の臺

其雲

船つる客の海にや嶋に梅

三十一 竹東

よきの梅をよき産の掃海式

磯山

空帷もぬきぬ家や月とうゑ

松号 巳有

山風やうゑにしらまき新き

出雲 帯手

梅の垣打にのち控にさき

桑陵

梅もたよき産のそと角に那

梅塘

うゑん提て好や回中咲とこる

梅后 楳后

梅もたや江にのちの月明り

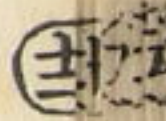
豊号 宜公

家もたにさき提もさうゑのそ

松舎

一きしきまこさき種や月と梅

金昌





いふまゝにやまの照はる日のまじり

一の雪

梅まきかたなる庭のうらみ

相雪

梅咲かたき垣根の四五半

<sup>下毛</sup>文窓

野嵐も出てはふるうらみゆめい

はる

管吹ふまゝに梅のうらみ

は賀

こまけはす四五橋のうらみ

大鵬

新りしきをみまき梅のうら

啓明

根まらうに貝売あてうらみの

少綿

新ん帯まきまにうらみ柳

酒宣

とや山や梅にうらみけるの

紫山

喜ぶ顔をかみんて照る梅の

精義

石車登り梅をまきまきまき

掌守

一はも喜にあまぬ梅のうら

<sup>上毛</sup>桂盛

夕顔を返して出で照る梅の

一宣

見るとちかるとして柳に揺らぐ

<sup>ヒゼン</sup>一化

層々たる梅をまきまきまき

三交





二層目より三層目へ下る木の芽式

出房 行砂

川音のきく里の標種クハ

出雨 露萩

家内中へ出てつらう構あ式

洗耳

茶子にまらつてゐるや五五寺

甘古

赤あきと細のゆめいお室の雨

五経

細あててゐるおのありよる机

上毛 海雄

船ちるる筆にのるお子の節

上毛 じ瓢

まいた黄にまらるる吹蒲の式

無名

連巻の雨つゝいさゝし納手桶

尾村

連巻におまむに侍るの産出行

上毛 鶴石

海菜おねの鮫のちやう口

旭高

接圓山

一層目より二層目へ下るお小手松

有苗

志免ゆるおの産アまお室の雨

月人

上巻におまむに侍るお手松

月極

アキ 了る人のみそおある深山二那

池燈





いふ雨の音はさきかきしてさるる

横山

あはれ... 節のまききし花々和

<sup>出羽</sup>金英

すくさく水玉... 雨の雨

古年

新ら... 椀のあはれ玉の端

魯雪

ちる雪おもふ... 雨の雨

望月

あま... 雪を一つさる小雨

梅雪

一通り... 雪のあはれる式

閑美

雪... 松に枝をまき梅の丸

<sup>松</sup>此君

さる雪のつくや梅の雪をたつ

<sup>正井</sup>砂山

梅... ちる雪おもふ雪をたつ入る

<sup>ヒシコ</sup>杖茶

梅... 一本の雪おもふ雪一つと

<sup>上毛</sup>一の道

山... 雨の雪のまき雪の丸

機城

手... 梅を見守りにさる雪つと式

南交

お... 雪つく雪泉村の雪を巖をた

未足

月... 雪おもふ雪に雪一つ

一雨

生類





昔島にちかき人々出て出る日式  
完臨

いんぎの言ハ橋に停り吊り式  
如山

美々のつやいおめもけり音式  
上毛 昭雄

昔が打よき一頁の空や  
上毛 孝之

いんぎの言ハ橋にきり尾の階  
出羽 碧石

権の壽堂とや尾の層一重  
石鼎

上毛 生にまるとお船とまき一の壽  
上毛 如牛

小屏風もとんと掃や雲雀啼  
言磨

横濱再港

糸菘に細とちぼりて啼く山竹  
豊平

山中らやらまえきり百子鳥  
霞心

新瀬の光りたるやけり雲  
松頂

雀の空く空がまきり雲もきり  
上毛 如白

立あくる才の言やまきり一なる雁  
尾張 孝崇

まきりたる相に月やまきり桂  
沓子

閑人言をまきりけりまきりふ如桂式  
武蔵 榮交





ついでに... 風の標

上毛 蒲田

... 葉の上

古 季民

... 後の節

山人 山子

ア、此處畜生堂に雨火多きと云う程お行を  
表す

呼出に... 猫も

清民

食料

白魚や古清夏のの標の古

石岐 星岬

... 波處の

石岐 抱苜

登... 田

和泉 此松

海... の

良

類

用... 冬

佛卵

沖... 甲

小坂 古崇

... 心

芳泉

... 程

彦民

... 地

序流



跡月やるこちまここの忌終栗 半夢

賊とくに門掃去の解波之礼 播 清風

ゆくはるや夕年を官の矢檣船 童子

夏之詠

と船を控に舟をこり 寸鳥 写我

月いゝる入るせて船の舟を吐寸 三ま雄

まゝくもたまき鳥さして子規 五由

いまもいぢらるるう 船々の郭公 文紀

才と春と家のやうさう 柳とまき 工サシ 梅庭

寸鳥 あゝと空ある堂とちり 小枝 越古

了うとく同く目いぢり 一と古鳥 奥 左終

まゝとくるくに 啼寸 鴨鳩 上毛 一止

水おとやさるの隙を果古鳥 出羽 一止

里の子や板表焚ぬに賊しこる 上毛 梅斜

平後のもてん 舟より けつ 雲 上毛 蜀洞

船に添て光とて みる ありる 舟 出羽 抄山



舟宿も風をいふおや燈もいふ

下池 李塘

舟宿も風をいふおや燈もいふ

梅通

乾坤

三丁の和の志をいふおや酒を

文海

大津お泊

明市一々枝の山風悔坐を

蓮守

能くして燈も燈にちるおや

上毛 吾吹

うらうらおや素庵の法も照のま

松芳 市石

故屋よりよるお洞の猿一丸

南 此一

森をうすお一お二おお故屋の月

吳 文人

去く去きお狸おけり席の雨

伊勢 雪尚

飯屋もおと奥おちりともつる

去形

曇のまぐ夕を燈あり五月雨

素水

まき標の山をうすお白帯月おを

茶雷

おこおき喜お機のおあり

出房 文交

五月月お坐りたをいふおの階

我意



青嵐舞する子のこころに

江戸 白

夕立の降る夜をたぬ中

為山

花実

花に風をきくは牡丹

涼呼

花の庭をゆくは雪のちり

大夢

花坐るくに花を牡丹

先和

花の伸ゆるをきくは杜若

上毛 雪和

花の花をきくは雪の音

尺西

花の雪をきくは雪の音

姑山

花の雪をきくは雪の音

上毛 桂城

花の雪をきくは雪の音

大和 文鳳

花の雪をきくは雪の音

尺外

花の雪をきくは雪の音

月村

花の雪をきくは雪の音

上毛 花村

花の雪をきくは雪の音

冷苗

花の雪をきくは雪の音

波田



淨潔の坐茶しりし子苗式

一魚

山乃が研すもあや田植うこ

<sup>上毛</sup>梅圃

紫陽花の雪が曇の路しきり

袷之

あちきあのそ暖にまさりきり

契史

こゝろ静かお紫陽花きり新傳し

<sup>日向</sup>亭こ

梅し子お寒にまさりきり

史山

登点お花のちきり

<sup>お房</sup>龜友

そよ／＼こゝろ静かお蓮の花

<sup>上毛</sup>梅白

雪の／＼お花をきりし

<sup>オク</sup>清傳

屏に静かお松い老にきり

美伝

倉類

船つりて先んに出るお門の室

似葉

云人／＼こゝろ静かお松い老にきり

<sup>女</sup>浪兮

後／＼にまさりきり

<sup>大和</sup>一の成

雪の／＼も少しあや／＼

尚丸

歌詠



虫うや極繁虫に居りて  
篠山や雪結のまゝ夕酌涼  
風追て冷しきあめのまゝ  
おへ出て涼むおとあし磯の家  
名打しあひのまゝ夕色水

祇園會

法乐に坐る是司人絳の潤

費字

而后

李噴

<sup>上毛</sup>八我

字極

<sup>上毛</sup>本道

秋之部

時令

初秋や坐降るく萩の色  
桐にまゝ暮るにそまゝそまゝの秋  
おへ入てまゝに秋のまゝにそ  
又月おおにまゝにまゝにそ  
七夕や風のとまゝにそ  
七夕や埃のまゝにそ

有節

<sup>土佐</sup>習作

<sup>中房</sup>玉賦

<sup>信濃</sup>守屋

甘菜

里乐



七夕のゆりみ帯や小松原  
様人の坐敷みよやその川

古嶽頂上

只言一秋下まき一土用宮  
秋風やんくまむ朝の星  
露の香や楳にせくみの音言ま  
橋東につまあにせき一うたの聲  
黒雲を羽くはまつまの空り水

上毛  
一呂  
登山

鳥囀

由儀

下理  
枕園

壯山

曉成

雪の月見をみる老をきたき  
石庭に坐敷をるる踊りこね  
月影の言また来一踊水  
思ふ予をうてねくせ月和  
舟のうてんぬき一もき火水  
まき一り野もハ朝のな和こね  
お空にお雲おく音の遠山まき  
お空の安まのそ下板のふ程

月山

芥舎

女  
稍露

山呼

上毛  
松雨

下毛  
成章

血子

五竹



船窓の柱まけりや幸祿古  
ある時に板敷と友や窓の秋  
北風

月

和を少一本の百に誇せよ此月  
古風

名月や二重のせる白のうへ  
三楓

名月や一度に思ふとき西の浦  
ふ実

名月や思ふとき一月の子  
下真流

名月や思ふとき一風の色  
明石

出あさるに月もあさるる市中  
備梅々

市中閑居

裁色に隣らうて秋の月  
完伍

柔の氣に手をまゐる月の小色式  
信玄

植木の

なる枝の幹へさき行ふ橙色  
士前

照る影も一葉くや桐の月  
遠強雨

汐時の木影もあさるる柳  
云推





中流て舞のまく指一柳

市猿

あまのあやふき虫の鳴一垣

<sup>出</sup>原峰

あまのあやふき虫の鳴一垣

寄三

あまのあやふき虫の鳴一垣

<sup>ら</sup>葛路

あまのあやふき虫の鳴一垣

一清

あまのあやふき虫の鳴一垣

素陽

あまのあやふき虫の鳴一垣

<sup>上</sup>毛谷郎

あまのあやふき虫の鳴一垣

信言

あまのあやふき虫の鳴一垣

<sup>下</sup>理秀峰

あまのあやふき虫の鳴一垣

善城

あまのあやふき虫の鳴一垣

<sup>上</sup>毛徐東

あまのあやふき虫の鳴一垣

希尚

あまのあやふき虫の鳴一垣

弘湖

あまのあやふき虫の鳴一垣

五渡

三入河原

あまのあやふき虫の鳴一垣

平海





夕すくくあしく草のさくく女  
こららけしあめあふまきの花  
咲きし空の草をくを園のうら  
まよふのまよふくまふ紅葉の丸  
船月に花をあらんこはまらり  
豆引て樹の葉の細く那  
柏杞の葉のまよふあふる船白

禽集

潮水  
不逞  
崖友  
葵白  
并壽  
梅裡  
鳥名

言に呼ぶあふもあふり  
砂原かあつちと花をまらり  
垣の虫をくくまのまらり  
子の花に相まらに海人  
まらあはくまらあはくまら  
能くあはくまらあはくまら

嘲墨来

已の空にまらりまらりあはくまら

古  
西  
柏  
對梅  
移  
一  
小

他  
小



松の壽のちるゝまに誇るゝ

出羽 素丸

空百たあまの甲ふりまゝ

立字

雁の啼く聲をいさゝか

尾張 甘岳

森へくだけ鴨のささるゝ

省南

はら鴨がささるゝもあま

尾張 風

麻さくたむい雲をよ

美濃 去高

月さすたあまの刀を啼く

芳子

写るゝも研るゝも切通

采飲

釈并混雜

啼ぬ松にあまの返りて

下野 西翁

あまのよとまをいさゝか

五石

松のやまの松さす

出羽 公榮

毎原が礎うらむい

嵐牛

月さすに幾程さす

和歌 夢外

司すつてさあまの

和歌 松子

少く考て加減さす

和歌 春年





きし 鱈也と 振ききりに 山あまき  
秋もまき 雁りし 市社 瓜 茄子  
鮭 洞を手のまゝに 刀さす ちりし 水  
道のある 海先の 魚也 秋の 風  
も 明く 優ち ちる也 ちあきの 雨  
少くしと 志 菰の 茎也 杖の 和  
も ちあぬ 本を ちる也 ちりし 秋の 夕  
け 秋也 田へ 獲りし ちりし 畑の 魚也

帆道

恒牙

<sup>下</sup> 汎家

葦水

葦涇

有秀

加屋

<sup>出</sup> 市也 櫃

冬の部

龜に 月さす ち 終ふ 町 雨の 柳  
町了に ちりし 龜也 ちりし 福の ちりし  
市人の 尊 頂 帰る ちりし ちりし 水  
利根川 也 町 了に ちりし ちりし 丘の 松  
ちりし ちりし ちりし ちりし 二日 月  
町 了に ちりし ちりし ちりし ちりし 山 丸  
降も ちりし ちりし 音也 竹の 真

鼎左

<sup>真</sup> 丁酉

宇竹

常雅

魯岳

<sup>下</sup> 庵 花

<sup>上</sup> 是 島



竹原がまゝ——うねの爲月夜

永操

一のちうが暖うさして小和町

路山

初冬が日にあつても多き一静

<sup>歩</sup>五鳳

吉傘社山根を通る小春丸

漸之

廿一日に経持出守小ける女

西東

遠山に影うも寝て小春丸

狐言

本村——や横筋来た下る坂

<sup>三ノ</sup>山士

人去て廣き戸口や冬社月

子兮

行燈の出て障あつた冬公院

乙也

ささる木の梢をあらう猿倉

<sup>周坊</sup>閑雲

おろろろり燃て眠まわら火水

竹烟

枝炭の深山——守燈のこゝろ

春柿

雪にまぎれ炭竈の火もあつた

雲雀

陣まが

初雪の月夜をあらぬ祇園所

公家

おの程くろを寝るまき初雪の松

うらみ



月より雪にけぼりし 湊に 新南

はつ雪やちぼりしけり ねまき 然こ

明くなる雪の終るし 雪の止 梅嶺

雪片か替んと袖のけぼりし 疎雨

寤る人のも人あがりけふの布 壺水

明雪を雪にまじりし 山家うら 移柳

降やうけきたる雪ある雪片 精器

戸をぬき雪をぬき雪の湖 下毛 子容

雪雪お袖に吹く 峰は雪 雪字

とくしとくし雪よまき 柳柳 南台

あやうく旭のまじり雪の麻うら 上毛 女雲

所はち炬のまじり雪の雪 小雲

雪木

山家雪のまじり雪の雪 ぬ山

たぐん雪おまじり雪の雪 山

山家雪おまじり雪の雪 明橋



茶の葉の点一りこころ集りし水  
近江 九峰

手を温てと人あるお帰りの世  
上毛 心星

紅葉ちるあとお小菘のうすい風  
高泉

肩ゆくや風にほゆる扇葉籠  
如風

白くまの事こころにせざる扇葉籠  
小城 岩崎

書室に青もあくる木の葉は  
路松

日のよきに光りしころあはれ水  
土佐 白浦

二三枚木の葉のこころに水  
露月

あつ尾葉のせくまの白のこころ  
桑 梅泉

枯をる尾葉もあつ尾を  
五雀

いつ降しきの空を枯尾葉  
由地

まじくも想ひもこころ尾葉は  
乙姫

こころを思ふたよりも枯尾葉は  
留我

枯子や水に落ちくこころ  
出羽 沖流

あつ尾の根をこころ木の葉は  
路風

あつ尾の根をこころ木の葉は  
露舟





空梅や鳥よりさすきり

英 乃二

寒梅に雪おひこく山は月

兼房

喜前もあて帰るか望田舟

持支

春まいて清川さるる口尋春

尋外

空に大根司きり風の空

豊雄

魚鳥

波遠くけえきつの子鳥丸

可大

貝売たつるが淵も登の世ま

素屋

信もすいこにのあり鳴る

上毛 乃所

ふるふる空たつる鳴る那

那雄

程さしりあきと鴨の尻ぬ池

自長

近なるけり鴨もく流る那

阿波 魯丸

さ波や何なるか鳴る那

上毛 漢高

水もか流るるに先人の

上毛 秀那

あきか流るるに先人の

住苗

あきか流るるに先人の

乃年



箱の口を流すにあらうしうきあそび

堅井

あそびの屏風に似る岩の形

杜水

あそびにぬけて膝あわ雨の響き

隆崎

洞代も味方に近き月も刀を

清民

歌一十

白の息を引て暮るお冬の雪

晴成

とくそころ刀をあらまへる留まの形

上人  
悠こ

書のおかほをきりて縛り印

上毛  
一掃

小机よこへまきこぼれおそく

豊道

山崎の舟まきのまこぼれ

浪之

室に入るまを配りおまに齒

蕉阿

ふとあらたきの敷のまを室さ式

只青

燈下ニ史を編まを冬衣を短うし

まき物議をうして

櫛うぬまをうすうすき表紙

甘志

納豆おしりまきまき子の日

許十





了てよき露の芽うらととりの露

序流

心持まゝの魚もよめおまをまを

尾張 二崎

昔季をたすけに通る古のつ

の浦

入もせぬ火を焚くもくまの影の如

善陽

おとろくや象才もついで古の

古友

一 籟居客中得興

坐を揮お左にまゝ一峰の雲

興字

上喜の如くにまゝふらふら

琴堂

風極まくの弱を借る燈を

字

宿しておき後か減ちり

堂

ささしとい月刀をるも尻をまに

字

一宿にまゝ寝て詞を替はす

堂





ちよらこゝと、穀根の本権、  
 胡粉まきろく、的の張、  
 あちろく、心替、の云、  
 雪風、  
 明神を坐に、  
 膳を、  
 月入て、  
 踊、  
 宇  
 宇  
 宇  
 宇  
 宇  
 宇  
 宇

織への、  
 こゝの、  
 梅園に、  
 紺を、  
 去、  
 去、  
 板根を、  
 あ、  
 宇  
 宇  
 宇  
 宇  
 宇  
 宇  
 宇



海より多くは茶にうる 長堤

字

降ありし早きあす流の雨

字

建よりききひ笑ひのさし白ひ

字

厚まぬ茶のまに配し

字

手はるりの陰をみあはしぬ

字

割下し水より流る 杉のまゝ

字

活きよりのまをみあはし月

字

こゝいりまのこゝる 華絆

字

渥赤の雲の舞をいぬい梅と花

字

引くまを花と松刃にゆく

字

まを眼よりあはせ肩車

字

はき替換の下詰に當りて

字

板橋に虫穴強し 花より

字

味へに日の近る 三月

字





松風にまひまのたきし紅菊水

母字

あさき流にうらふ夕月

子容

白の層にまつくさけぬの手て

字

遠は寸家の木も掛ひきり

字

空滑てよむまをく表所

字

持えしひしー藪への傘

字

を梅の葉もつと大予こそ

字

きふもまきてみる縁まの幅

字

そんくを酸いまの面も腹ま

字

とこもうき名のつとまけいせす

字

ぼくらの居りにこる小柳燈

字

板の弓けしる広のしり水

字

虫にあらつくるい打も

字

笑けししる縁をわしこる

字





恐程に橋のふもとよりすれまゝ  
あり捨ておく菘尾の細  
言いのもはや程のある月と  
此といふ夏の夕まきしら魚  
古いより先へさるる鯉の  
爪て出さるる蟹のいこつ  
手へすたに古いさるる赤子漢  
まゝ酷くやう陸尺のまぬ  
字 空 字 空 字 空 字

丁細をちひさなまに替へて  
あまのいさるのなる足あるく  
拾ひしき石に根のある宵の月  
海人々々あるを板巻露々  
啼て行鴨の春も秋にも  
菘の刺に袖を穿つる  
あまのちひさるる仇通し  
凍えて居る玉井の氷  
字 空 字 空 字 空 字



呼ぶる花も明露の 的の中  
何れも月の海のつらさうま丘  
あまのりー一文筆子のまろし  
上り端にあく紡車ツクハのあふま  
お庭に人のまをうらま吹て  
雲につくくまぬの 水  
宇 容 宇 容 宇 容



勢よくに鵲の田へまゐるや和へ那  
水潤き風のをく  
玉洗ひ男もまろく姑のまろ  
月つらさ苗の達ちあそある  
雲鳥の燈子トウの松葉マツノハ  
このこいて味のこころまろし  
宇 容 宇 容 宇 容  
世宇  
成章





妻の手に水漬くくはれ、麻の皮  
垣より燈をちゆき、福の古  
産忌いふつのもはれ、籠り佳  
節の古留まの籠り、ささる  
推のち、紅茶、ちゆき、産忌  
ちまき、形々に晒布つく日  
夕月の中くあまき、雪の際  
河麻はちりて、亭寸糸、糸

雪のち、蒲葦、籠り、ちまき  
了怖、ちまき、雪の、瀬、ちまき  
あつくと燈、あつくと雪の、雪  
接木の層、ちまき、て、ちまき  
善化古の籠り、ゆる、ちまき、ちまき  
肩操、ちまき、行燈、ちまき  
耳、ちまき、物、ちまき、父、ちまき、子  
淡、ちまき、ちまき、輕業の、小屋







和消て様とせざる也と書し  
 表をも前を泡華の碎  
 媒人の台のころいさよし  
 原瓜らて針ももろく様守り  
 二三枚投出である古因坐  
 宇治の案内の尻につきゆく  
 在明の勢をさるに聲付て  
 ありて多き物の掃とせ  
 字 章 字 章 字 章 字 章

ちまきよきて経しとて書き  
 古部屋の口のと様も似てある  
 流行する嶺峰相おふ茶とて  
 ありと書しと刺をしと書  
 ゆるくと池にいとよと書  
 夏をとりしとて書しと書  
 字 章 字 章 字 章 字 章





年内立春

とくはあまらさきしきりきり

序流

今春空梅の蒼さくる

不甘

大株の瓦の下地管けわて

夢外

海のうへさうさういあはまら

契字

名りうに月忍も際つり

霞舟

硯の水はまゝあささけける

流

烟も椎のささきやき

甘

肩まつまゝあや字外

外

春のうへさうさういあはまら

字

従捨らるる古湯屋のお

舟

来る風もさうさういあはまら

流

酒一玉あまらさきしきり

甘

夕月にあまらさきしきり

外

さうさういあはまら

字





甘くをふる高坊もきりきり  
 手は伸せに汲る井の底  
 長尻の足刀さあまいた  
 紙箱あくるるをこきりあま  
 捲い来し籠の柳の砂ま  
 とも程と面をあまぬまぬ  
 古所町の古鞍ふるおひ  
 ちよとと毎々四五両の金  
 舟 流 甘 南 舟 甘 流 舟

雲を捲いかにゆき雪の舟  
 まき物うそはうそをさく  
 行燈のともを針の穴とす  
 田舎のやうに麻布十疋  
 あのかん此ころこゝろの鳥  
 程ふも肩を休まきり月  
 目の赤うはき觸りこり  
 二重洗濯はあしき怪子  
 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟



あきくはむいなるまら  
橋のゆくまにんまよ  
持てまらこらなま  
六ちの名もある石の玉垣  
苔あふむ水まらくそ  
空は青きよきまら風  
流 舟 石 舟 舟

附録

麻島日記

秋のまらそわまら  
寺とすえー慈徳和尚の詠を思ひ出さるる佛の  
禪師こまらゆの事いひまら  
のまら心こまらそ一万延紀元康申の  
まら字をまらまらかそ江戸橋のまら  
こまら行徳へ派



情のさるる森よりの川柳 興字

潮時あはれ舟の進みくまはれいハはさりあまにむき  
て空を渡るくまいたに雲を渡りくまはれい  
秋色さるるに情を励ませ

江戸を去りて字の月夜に 字

十三日 あまはれいこの情——さるるの情——  
竹林をうらにさるる情の原こころをさるる  
七段の——さるる小松まはれい涙をさるるの秋字

さるるに情をさるる情をさるる情のさるる情をさるる  
てに牧童のこころに鞍くらあり笛くらもさるる情をさるる  
手巻の情をさるる情をさるる

折らして尾をさるる世鞠のこころ 字

と情をさるる情をさるる情をさるる情をさるる情をさるる  
けさるる情をさるる情をさるる情をさるる情をさるる情をさるる  
此の五段の情をさるる情をさるる情をさるる情をさるる情をさるる  
さるる情をさるる情をさるる情をさるる情をさるる情をさるる





舟をあらうと月杵の亭をあらうと云

十四日 難写より少一雨ありて冷衣を透す午時

いりには控を控いこまんとおもに舟三拾きとある事

半時左の岸と控い押砂といふ一村に丁知居士の舊ま

莊園ありとのありし況をいふを仰いそまの二舟行を

とてせんとその二舟にすいとる事のみをまきてい

ちるも此お佐原にせるとる事とのいふ人といふに

待宵お先んをまゐる麻山 月杵

十五日 おもくまの舟を付けて昔の船をあらうと云

まの舟より舟ありし津の室に堂の築とて

まはしく云をあらう舟をまゐる山の麓ありしと云

ぬい帰路にまを渡りうち時うらぬと楳子舟を

又渡出せに風初くに斜陽浪を照してと云

破眼を打拂しとまにあらうの舟をまゐる

けりうにあらし程まゝ大船戸をあらうといふ

まを侍の水楢をあらうといふのあらうといふ



松江の鯉ありと存あり、興すにうづほして生るは渡世  
山持に五法く白露江に横たり、水光天に接て  
雲霧垂垂湖に彷彿し、幽に生るは怪火い  
大徳蓮華の仙窟にあたり、いとまをみる人の極あり  
此江に純子たり、沙ききまうて川を裁ふ何て  
浪逆のうらありと、お

名月おまの宗壽の江に、  
梓 宇  
續の言、まてゆるとる月見式  
梓

十六日 松魚の名、海にまき、お別、るはまを  
はまは海に、漸き、社に、る。

若の雲、光るは、う、だ、う、ま、山、  
宇  
雨風を押し、る、月、の、う、ま、石、  
梓  
之、う、う、石、の、う、ま、ま、う、く、ま、  
宇

言、万、原

砂は、う、お、松、も、ま、う、寸、秋、の、壽、  
梓  
山を、り、う、招、本、寺、に、禪、海、と、祖、翁、の、書、讀、を、接、  
梓





月平と或せし様一あを尋ねて

そはともも柳をみる月の梢に

去る月はいさよ松の葉と

十七日 帰路

乙島に碇の逢きし浪逆溜

千六島のうち

秋風お水にひそく一扇ま

言ふ柳を揺る場

紅葉の十と平一杖の燈 字

名もなき詩興

刀を帯に柳も遠く乙女の月

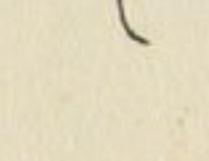
川風和しあとの空おしこ 契字

花一絡案のおちる苔もついで 梓

隣ていそる古藤を指す手 宇

水仙につく葉畑いあはれと 梓

こゝろをまよふ牛の鼻いき 宇





榊酒いけりてはも換をせむ

榊

あやうしと申ふ身しふ

字

秣十と程ぬ河原を切せり

榊

菰に並りるる乞の佐馬

字

片隅に何なきやうし連

榊

古屋の廊下も燕更ちり

字

月代の月を程い油の音もや

榊

うら枕燈に虫のとりつく

字

秋もはや揺ゆ赤の暇に去り

榊

此玉川の江戸のあつと

字

晴らぬ鳩もそらの雲

榊

第一て梅も美草の薙

字

まのふき手程柳も片つりて

、

飲友達の上へ入るる

榊

庭ゆりてうらるるいあうり

字

夏いほりき夏屋 尾 崎

榊

⑤



菟子ちの吹をいよに垣りんそ  
 新に恋のさるし森すそ  
 庭あとの追風を頼ふ人いよ  
 をいよあてきふ獅子舞  
 門前の海濱もいよは緑日  
 ねくもあつたあまい海りき  
 あのかの枝のを怪しむ麻の自の松  
 何より軽うくは搦柿  
 字 字 字 字 字 字 字

春をさるし折端にあふおんち  
 のしをちまにわしききき家  
 ともくは木をのめるまじい水  
 謀りまきまきのさけ  
 減りの素茶をつくるあま  
 長に櫃の写す寸小障子  
 字 字 字 字 字 字 字

顔満す時舟い掬坐の着下こありしを  
 秀峰を待まけお話するに足る  
 上り





よおまのふのいものよき既に二哲の序  
詞にやうちほいしるはのこころしきる毎  
子著す日記のまじり此編の事一に由縁  
ちまほをたよすはる風極まほにるおと  
共このにたりほくもたはのよちまほを  
此まほをたよすはる風極まほにるおと

よおまのふのいものよき既に二哲の序



